

種イモ用のコンテナを急遽増設しました

低迷する農産物価格に寂しさ

「青春農業」。前号で紹介されたように去る7月、北海道富良野町で開かれた北海道農業機械フェアのテーマです。なかなか情熱あふれるフレーズで気に入っています。やはり常に青春の気構えで臨まない、この難しい農業情勢を乗り切るのには難しい感じがします。

それにしても、昨今の農産物価格の不振には、驚きます。昨年は0157騒動で野菜を中心に低落したのはやむを得ないのかという気がしましたが、今年は、まず日本農業の中核作物である米の価格低下に、目を覆うばかりです。我々はこの農場を創ったときから、米には固執せず野菜、畑作物での営農展開を図りましたので、日本農業を悩まし続ける米の影響はほとんど受けられないものの、周りをみると、米で生きている多くの人が困窮の表情になっていることに寂しさを覚えます。

この夏は、青森県津軽地方が産地となっているスイカもメロンも価格が伸び悩みました。9月から収穫が始まったリンゴの価格は、前年を2割も下回る価格でスタートしました。そして、私の担当作物ダイコンの生食用価格も振るいません。

黄金崎農場の作物は、契約栽培的なものが多いので、ただちにこうした価格低下によって大きな影響を受けません。それでもじわじわとジャブが効いてきます。価格低下するのは、消費者サイドにとっては望ましいことです。だが、生産者にとつては、コスト低下、合理化が追いつかないとすれば惨憺たる状況になるのです。それだけに価格の不振は気になります。

価格に関連したことで国の行財政改革の行方も

危ういものがあります。このままでは農業支援政策が後退するようです。それに、公共事業もかなり切り捨てが進むようです。地方では1次産業と公共事業が景気浮揚のかぎを握っており、地方住民の自努力だけでは限界があるだけに、心配なところですね。

バレイショ収穫に2カ月

9月に入り加工用から収穫の始まったバレイショは、途中で種芋用に切り替わり9月下旬になってようやく終わりました。ポテトハーベスタ5台で約95haの収穫を終えるのに2カ月のロングランです。雨や、人のやりとりもあつて、例年、この程度の期間を要しているのです。収量は昨年の平均2t程度に比べると、大幅にアップしており、10aで5tあげる畑もありました。そのため、種いも用の1・5t収納のコンテナが不足になり、急遽200基を追加するという事態が生じたほどです。岩木山麓に昨年建設した貯蔵施設は、今、このコンテナに入った種いもで満杯です。この施設がなかったら貯蔵場所の確保に四苦八苦したところでした。多額の投資を要しましたが、昨年この施設を建てて良かったと思っています。

バレイショの跡地には、小麦が作付けされます。その肥料散布、耕起作業にトラクターが走り回っています。最近では、500kg入りフレコンバッグに入った肥料を使っています。リフトでこのバッグから一気にブロードキャスターに流し込むため作業効率は高くなり、肥料散布はさらに省力化されています。

ブロードキャスターなど付属機を付けたトラクターが岩木山を背に広大な畑を走り回る様は、い

つ見てもダイナミックなものです。その岩木山は標高1625mの津軽の秀峰で津軽人すべての心のよりどころといつても過言ではないほど、人々に安心感を与える山です。

この山を青森県金木町生まれの作家太宰治は小説「津軽」でこう書いています。

「したたるほど真蒼で富士山よりもつと女らしく、静かに空に浮かんでいる」

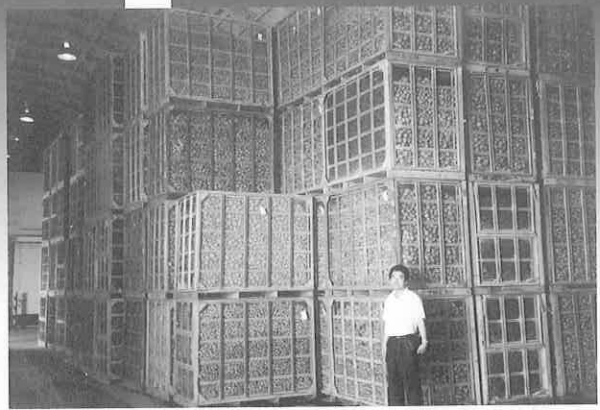
だが、我々の畑はその岩木山の中腹に近いところなので、そこから見る山は武骨で男性的な趣味です。その山に抱かれての農作業は、心地よい秋の風と空ともあいまって、えもいわれぬ喜びを与えてくれます。

農場で1億円以上の売上を誇る加工用ダイコンの収穫、塩蔵作業が始まりました。今までのところは生育が順調で出来秋がうれしいといったところです。前号では生食用のダイコンハーベスタを紹介しましたが、ほかに北海道芽室町にあるロークリエート社から加工専用のハーベスタも導入しています。この機械での収穫作業はすこぶる順調です。

オペレーター1人と助手2人で1日40から50a程度の作業性があります。可食部と茎葉の間のカッティングがきれいで、茎葉を後ろに棄て放り投げる機能も気に入っています。11月まで故障せずに活躍してもらうことを願っています。

機械への投資は経営圧迫の要因となります。そこで、導入時は慎重にならざるを得ないのですが、そこに補助事業があれば、負担軽減に大いに役立つことになり、規模拡大にもつながります。国にはどのようになっているか、日本型の畑作経営の規模拡大を図っていくべきかを、哲学としてもっていただきたいと思っています。

来年度は、大豆用の播種機や収穫機、あるいはバレイショの選別機を導入したいと思って、先日、



上：貯蔵庫満杯の種イモ
下：農場の機械達



農政局の職員といろいろ議論をしました。国の職員はそれなりに意気込みがあって頼もしいところがあります。こうした現場に近い人達の意見も聞いて、農林水産省が日本農業の行く末を考えて政策判断をされるよう願っています。

ダイコンの品質には自信がありますが、気になるのは価格面です。先に書いたように契約栽培とはいえども、生食用や他の農産物価格の影響を受けます。苦しくなるのは目に見えているので、新たな発想で取り組んで必要があるとみています。

消費者に対する経営内容提示

これは加工業者の話ですが、将来は生産者が加工業者に加工を委託するだけで自ら販売するようになる時代になるかもしれないという予測があります。確かに、最近では素材そのものが消費者の大きな関心になっています。それは、行政による農産物の原産地表示の実現に結び付いたり、無農薬や

低化学肥料農産物の需要拡大につながっています。この原材料にこだわる潮流の一環として、農産物の生産を担う側で、その生産方法を明らかにして責任をもった販売を行い、消費者の信頼に応えるシステムをつくる必要があるでしょう。

これは、考えてみれば当然なことです。加工という工業的なシステムでつくられた製品はほとんど違いがありません。ところが農業生産は、土、気象、資材、機械、管理の仕方などにより生産物ごとに違う面があるのです。こういったつくりられる過程を責任をもって明らかにしていくことは、非常に大切なことなのです。情報公開はなにも役所へ求めるだけではなく、我々農業者にとっても必要な時代になりつつあるのです。こうした視点にも立った新しい経営を考えていかなければならないでしょう。

また、単なる加工だけでなく、例えば外食産業が求めるような小さいもの大量パック詰め提供などのようなことも検討課題としていかなければならないでしょう。大量に生じているすそものをうまく付加価値をつけて販売していく、こうしたことは高齢者を活用できるというメリットもあるだけに、実現に向けて取り組んでいく必要があるとみています。

これまでどおりの営農ではなく、新しいことにチャレンジする、そんな青春の意気込みはまだまだなくさないつもりです。

省力と生産力向上に努力

省力と生産力の向上、これは開設以来の当農場の大きな課題です。そのために、さまざまなことに挑戦してきました。自分ではあまり大したことにはやってこなかったかと思っているのですが、どういはずみか、10月に開かれる日本農作業学芸会「中山間地500ha畑作農場の作業技術」と題し

た話題提供をすることになりました。省力という面で研究者の前で拙い体験を発表するのは、気が引けるのですが、伸び悩んだ日本の畑作経営で少しは規模拡大したという観点から話をし、専門家の人達からさまざまなアドバイスをもらいたいと思っています。

生産力向上に関しては、最近、はやりのようになっている酵素、微生物などの活用に私も関心をもっています。先日、ある席で紹介されたものは100cc1本で1万円という酵素です。その散布によって出来たダイコンが1本20kgということを書真で見せられると、やはり使ってみたいという気になります。こうしたものは思い込みの分もありますが、客観的に評価できるものもあるようにみえます。ただ、公的機関でのお墨つきがなかなかつかないだけに、慎重に対処することは必要でしょう。

省力面で、最も効果があったのはやはり大型機械の導入でしょう。国産だけでなく、外国産のものもかなり入れてきました。外国産機械はがっちりしているという点は見逃せません。その開発状況には、海外といえども目が離せません。そこで、11月、ドイツのハノーバーで開かれる機械の展示会にいらってきます。この展示会は全世界からの農業機械が集まり、すべて見るとすれば3日はかかるほど規模の大きなものです。この状況については、次号でお知らせします。



きむら・しんいち／1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立